

学校の脱魔術化過程・再魔術化過程

ウェーバー「官僚制論」の再解釈を通して

柳 治男 (元 熊本大学)

1. 学校論と官僚制論

学校は、重要な社会化機関だから、教育社会学研究の重要な研究対象となるのであろうか。このことは一面では疑う必要もない自明な事のように思える。しかし、学校を現代社会に固有な官僚制組織の一環として理解するという課題意識が不明確なままでは、不十分である。学校の官僚制的構造を確実に捉え、合理性と言う近代社会成立の論理を、教育社会学の学校研究における基本的枠組みといまだになしえないのはなぜか。本発表では、学校研究が陥っている自明性の罫と、その背後にある原因として見うる学校の再魔術化という現象の存在を指摘し、学校を問う意味を検討する。

2. ヴェーバー官僚制論の宗教社会的背景

従来のヴェーバーの官僚制論は、「支配の社会学」で理念型として提示されてきた諸構成要因を列挙し、それを具体的な個々の組織に当てはめ、その妥当性を吟味するということで進められてきた。教育社会学における学校研究もまたこのような問題設定でその是非が検討され、学校への官僚制論の適応不可能性が導き出されてきた。しかしこのような議論の展開で無視されてきたのは、本来ヴェーバーが官僚制を社会学的問題として位置づけた根拠である。

ヴェーバーは、近代社会の成立を「社会の全般的合理化過程」と呼び、合理的官僚制の成立をこの過程の中に位置づけた。さらにこのことを宗教的意味で、「世界の魔術からの解放」と呼び、合理的官僚制成立の背景に、脱魔術化過程があることを強調した。この合理化の背後には、カルヴィニズムの被造物神化拒否の思想による脱魔術化という宗教的合理化過程がある。このプロテスタントの宗教活動は、現実の生活からあらゆる共同体的、そして情緒的、衝動的関係を排除した即物的な関係に人間の繋がりを変えてしまう。さらに人間の行為を目的合理性へと一面化し、彼らに内面的に孤独な生活を強制するものであった。当然現世の快樂を否定せず、呪術的活動に意味を見出す人々の激し

い反発を生まずにはおかないし、現実の官僚制組織の展開過程は、この緊張関係から逃れることはできない。

最近のヴェーバー研究は、近代化が進行しつつある19世紀ドイツに成立し、この近代化がもたらす画一化に抵抗すべく生まれたロマン主義への共感と批判が、彼の官僚制論の根底にあることを強調する。ロマン主義の立場からすれば、この進みゆく宗教的合理化を媒介に進展する近代化とは、個性や感性を否定し、自然を破壊する非合理性そのものの拡大に他ならない。しかしまた、この進行は、避け難い近代の宿命でもあり、ロマン主義者のように単純に否定しうるものではない。理念型としての官僚制論では、あくまでも西欧近代社会を作り上げたプロテスタント的価値意識から導かれる合理性のみが語られ、それから逸れる人間の行動は非合理性という範疇に組み入れられてしまう。ロマン主義にかかわる思想や行動は、理念型としての官僚制論では当然のこととして論理的に排除されることとなる。しかし現実レベルで見れば、ロマン主義が強調した個人の全体性を保ち、官僚制的支配からの解放を希求する主体的行動も、そしてまた感情も、非合理的という烙印をおされ、排除されながら、組織に抵抗を試みる。ヴェーバーの官僚制論とは、このような緊張関係を内包した概念であり、固定的な、あるいは一義的、平面的な概念ではない。

ヴェーバーの官僚制論を宗教的文脈の中で理解し、彼のロマン主義への共感と批判を踏まえた時、学校を官僚制組織として位置づける分析視角が明確となる。それは近代学校がもたらした義務就学を、あらゆる衝動性や快樂原理を否定する官僚制の世界への子どもの包摂として理解することである。禁欲主義的な目的合理的行為的生活と、今を生きる存在としての子どもとは対極的關係にあり、また日常的、常識的に流布した子ども中心主義言説とは非親和的關係にある。現実の学校は官僚制化と反官僚制化という二つの動きが衝突する場である。ヴェーバーが「支配の社会学」において示した理念型としての諸属性が、学校にそのま

ま具体化しているわけではない。

学校の官僚制化をめぐる議論が不毛な結論にしか達し得なかった最も重要な原因が、ここにある。義務教育制度の定着に伴い実現した大多数の子供の就学をそのまま追認し、学校と子どもの親和的關係を背後前提として学校論を展開させ、官僚制化と反官僚制化との対抗關係という分析枠組みを明確に自覚し得なかったことにある。

3. 脱魔術化と再魔術化

官僚制組織としての学校は、この原理的にかみ合わない子どもを組織に馴致させ、その存立を図らねばならない。このような必要に、学校はどのような回答をもたらすことができ、今日の一定の安定性を保ちえているのか。いうまでもなく、暴力的に管理し、子どもの規律化をはかることが、義務教育制度開始期には図られた。しかしこの力による政策はすぐに行き詰まる。子どもを活動の対象とする学校は他の官僚制的組織にもまして、理性よりも感情に訴え、学校を魅惑的な聖域として子ども達に認知させねばならなかったし、教師の中にそのような使命感を醸成せねばならなかった。また、ロマン主義的言説に対抗して合理性の論理を貫徹させ、官僚制組織として学校が備えるべき合理性を損なうことがないようにしなければならない。

制度としての学校の相対的安定性は、反官僚制的傾向の巧みな操作と、官僚制化させる戦術が採用されていることを意味する。それは、意味喪失した官僚制の世界に、新たな意味付与戦略を駆使して、無機的、機械的システムに新たな息吹をもたらすことであろう。「マクドナルド化する社会」で20世紀後半における官僚制組織の展開様式を解明したリッツアは、次いで、「消費社会の魔術体系」を著し、ヴェーバーの官僚制論に独自の解釈を加えつつある。彼は「生産手段」ならぬ、「消費手段」という概念を駆使し、今日の企業は、スペクタクルや内破を顕示する新しい「消費手段」を駆使して顧客の購買意欲を掻き立て、人々に必要以上の消費を促す魔術を駆使しているとした。そしてこのことを彼は、再魔術化と呼んでいる。

このような議論は、学校研究に新たな地平を開くものとして理解しうる。近代学校とは、その成立期から

この再魔術化過程の渦中にあった。リッツアは、マクドナルド化として示したチェーン・システムの成立を、20世紀後半を特徴づける組織現象としているが、学校こそは脱魔術化と再魔術化のドラマを、近代社会の成立過程で最初に、そして見事に演じてきた。ここでもまたリッツアにならって言えば、近代学校制度の成立は、多様な「教育手段」の開発によって支えられてきたのであって、快楽や自己陶醉という情動性を賛美し、それらを誘発するエンターテインメントという舞台を学校の中で徐々に整備し、さらには学校外にも拡大し、教育言説を産出するメディアの内容を拡大することによって達成されてきた。チェーン・システムが学校からあらゆる分野に浸透しているように、この再魔術化戦略もまた学校から出発し、社会の隅々にまで浸透していると言えよう。この過程で、かつて対抗言説であったロマン主義は、同化言説へと華麗なる変化を遂げた。学校研究はこのような魔術化過程に無意識のうちに組み込まれて、学校への鋭敏なる感性を麻痺させられ、学校分析に固有な認識枠組みを構築しえないままに現在に至っているのではないだろうか。

4. 教育社会学的学校研究への展望

ヴェーバーの研究から100年余の今日、リッツアをはじめとするアメリカの組織社会学者が、再魔術化という新しい概念の下に、消費社会における官僚制の展開構造の特性を明らかにしようとしている。この動きに触発されて、脱魔術化過程に焦点を向けて論じられてきたヴェーバー官僚制論の中に、再魔術化過程に関する議論を加えることの意義が吟味され始めている。いわば近代社会の成立期において主として生産の舞台を基盤に作り上げられてきた官僚制論を、消費社会を舞台に再構成し、議論を深化させようとする試みが拡大しつつある。学校論は、このような動きから大きな示唆を得ることができるのではないだろうか。

参考文献

- 野口雅弘 M・ウェーバーにおける「政治の弁証」
 荒川敏彦 脱魔術化と再魔術化
 G.リッツア 「消費社会の魔術的体系」